

## 京都高齢者事業団の高齢者協同組合づくり

——働くこと、そして働けなくなったときのこと——

鍛谷宗孝(京都高齢者事業団)

### はじめに

2月21日、大雪。市内でのこんな沢山の積雪は何十年ぶりのこととか。市内の洛西の方の運動公園の現場で働いている南清治団員(83歳)は、雪の中、いつものように、京都の東の端から西の端の現場へバスで向った。

雪の中での仕事がこたえ、風邪から肺炎へ、そして息を引きたるまで1週間とかかからなかった。

高齢者事業団では、年に何回も、こうした団員との「別れ」を経験する。

他方で、体力が衰え、現場での仕事が無理な団員も年に何人か出て来る。仕事は仕事で責任のある仕事をしなければならない。現場からは、「高齢者事業団だからみんなて助け合って」という説得に、「それはよくわかっているが、やはり限界がある」という返事がかえってくる。

やむなく、仕事を離れる団員に、「いつでも顔出しな。ここは、みんなの場所だから」といって送り出すが、団員の目には涙があり、仕事からはなれて直接の用事のない団員には事業団の敷居は高く、よほどの用事がないと、二度と顔を見ることはない。

20年前、事業団の仕事は、4時間の草刈りの仕事から始まり、今では、6時間の「清掃」の仕事が主流になってきた。体力に合わせて、6時間の仕事の無理な団員は、4時間の現場に移り、4時間の団員は「内仕事」の現場に移っているが、4時間の現場と「内仕事」では、労働の強度や収入に大きな差があり、できることなら、その二つの中間にもうひとつ仕事の現場があればと思っている。

「就労の場の確保」「働く場をより充実したものに」、したがって、「よい仕事」「民主主義」「全団員経営」といつてきたが、確かにある限界に、

いつまでも目をそむけてはいられない。

「働くこと、そして働けなくなったときのこと」このテーマに向っていくこと、それが、高齢者協同組合へのトビラをたたくことである。

### 高齢者協同組合への扉

働くこと、そして働けなくなったときのこと

働いている団員にとって、事業団で「働いている」ことは、その人の人生すべてであるといってもいいかも知れない。

2月の団員学習会で、「もし事業団がなかったら、みんなはどうしているかな」と聞いてみた。「さみしくてしょうがない」「家にばかりいて体悪くしちゃう」「やっぱり他に働くこと見つけてると思うけど、こんな年寄り働かせてくれるところなかなかないね」……。

自分が事業団の団員で、働いているんだという人は、やはり、そこにその人の人生の实在を感じる。

「孫が遊びに来いというけど、事業団の仕事が忙しいからいかれないよ」という内仕事で働く団員の声。自分の人生があって、生きる軸があって、家族との関係が成立している。

「事業団で働いていて一番いいことは、自立していただけるということね」という元看護婦さんで息子は大学病院の医者をしている団員のことば。

また、ある現場では、お弁当を二つ持って来て、朝と昼とワイワイいいながら食べている。「仕事はきついのは構わないけど人間関係のきついのはねえ」

自立した自分の人生、なまかがいて、社会に貢献している。その中心にあるのが仕事。中心軸の仕事ができなくなったときに、人生から離脱しないように、人間関係をつくり、継続させる。ここが、高齢者協同組合づくりの考え方の第1ポイント

トになる。

そのときに、一人ひとりの人生のつながりとして、仕事と仕事ができなくなったときのことを連続して高齢者協同組合の視野に入れること。言葉をかえると、就労部門を含んだ「高齢者生協（ないし協同組合）」にすることが第2のポイントになる。

### 溜り場づくり、情報ステーション

働くことそして働けなくなったときのこと、その中心に、豊かな人間関係の継続があるとして、具体的にはいったい何をするのか、何から始まるのが大切なことになる。

京都の全日自労の組合員の話が、これからやることのひとつのヒントを与えてくれている。

千本支部では、京都南病院の協力を得て、「千本自労診療所」というのをつくって、もう何十年も続いている。そこで診療を続けていた川合先生のお話によると、線引きの結果、失対をやめざるを得なかった旧組合員のおばちゃん連中が、今でも川合先生の診察の日になると、遠い人は大津や奈良から、息子や嫁に連れられてやってくる。そして、待合室で日なが一日とはいかないまでも、半日ばかり、自分達でお茶を入れながら、だべっているそうだ。

南部支部では、中央市場で仕入れた物を、職安の労働出張所に日雇雇用保険の認定金をもらいに来る人を対象に販売して、結構、便利に利用されている。

大阪のどぶ池にあって衣類をまとめ買いして、皆なで分け合っている組合員もいる。

働けなくなっても、「診察がある」「欲しい物を売っている」というきっかけがあると人が集まって来れる。

人が集まれるきっかけをいっぱい、いっぱいつくって、溜り場をつくる。溜り場からまた新たな情報が発信される。

その溜り場が、情報のステーションになり、行政のサービスがそこにいけばわかる。旅行にいきたければ、そこにいけばわかる。若者の溜り場、

遊び場はいっぱいあるが、年寄りの溜り場はあまりにも少なすぎる。自分達でつくった溜り場が必要。学童保育を見ても、小さなアパートの一室でやっているところもある。自分達で溜り場をつくるということができないか。

その溜り場には、ヘルパーや看護婦はもうできないが、そこで相談役になれるという人は、時間を分担し合って、溜り場のイスにすわってればいい。

事業団をやめた人でもその溜り場には気がねなく来れるようにしたい。

### 高齢者共同購入事業と

#### 「5・22高齢者まつり」

まず、物資販売からやってはどうか。センター事業団の札幌事業所が「じゃがいも」の販売を全国の事業団に向けて行なった。京都でも取り扱ったが、正直いって事務局は、「よけいな仕事がふえた」というのが半分ぐらいの気持であっただろう。しかし、よく団員に聞いて見ると、結構、評判になっていて、「北海道のじゃがいもはもうないのか」という声が出て来る。また、「田辺の梅干しはもうないのか」という声も出て来る。

3月28日の、京都総評の春闘フェスティバルで売れ残ったパンジーを事務所の外に並べて売ったが、なかなか華やかで、団員の評判もよい。

物資販売をやろう。そして共同購入へ。そして、地域で班をつくって、家にとじこもりがちなお年寄りを外へひっぱり出そう。

当面、不用品のパザールも含めて、5月22日に「まつり」を開くことにした。全国の物産を事業団のルートであつめ、京都障害者共同作業所で行っている野菜や小物を売り、センター事業団の神奈川の麻溝事業所にいる藤田さん（パンづくり40年のベテラン）のパンを売り、近所の人に大ぜい来てもらい、何よりも事業団の団員とそしてやめた人も来れるように。

考えてみると、年寄り向けの商品というのはあまりないように思う。京都生協と相談して、高齢者の共同購入実現のための商品開発、班づくり、

班運営の方法の検討など是非、是非やりたい。

靴なんかでも、足の弱くなった高齢者が使いやすいものが本当にあるかというところでない。そこで、ハタと考えると、労働者協同組合グループにパラマウント製靴があった。そして、ハイテクのタウ技研がある。タウ技研の技術で高齢者の足の「型」をとりコンピューターでパラマウントにつながる。一人一人の足に合った靴が一人一人の手に届く。こんなこともできそうだなと思う。

他方で、一人ぐらしの全日自労の組合員から、財産を預けるから面倒見てもらえないだろうかという相談がいくつか舞い込んで来る。事業団の団員でも、事業団で働いてもらった賃金を一銭も使わず溜めて、何百万円になったので、出資金として使ってもらいたいと申し出て来る団員がいる。

共同住宅がつくれそうだ。共用スペースには、「よろず相談所」「ヘルパー・開業ナースセンター」「共同購入の店」などがあり、医療との連携もしっかりしている住宅。みんなが寄り合えば、夢ではない。

一人一人の状況や要望を聞けば聞くほど、やれることが出て来る。本当に、高齢者自身が望んでいることが、具体的な仕事の土台にないといけない。信頼関係がないとなかなか出て来ない。団員は事業団そのもの、つまり、働く場としての事業団、そこでの人間関係は信頼しているが、「働けなくなったときのこと」について事業団で何ができるか信頼はしていない。われわれが本気になることがその信頼の第一歩。その本気がわかりやすい形であられること。当面の5月22日の「まつり」は大事だと思う。

### 地域懇談会から高齢者協同組合へ

とりとめもなく書き連ねて来たが、条件はだいぶ整理されて来たように思う。もっと条件を出し合い、活動に結びつけるには、継続した懇談の場が必要だと思う。

京都高齢者事業団、センター事業団、京都生協、ここがひとつの軸になりながら、医療関係、役所のメンバーも含めた、懇談会、その実践的發展と

してのプロジェクトチームの形成を当面のこととしてやっていきたい。

京都で、この1年間、団員の議論から始まり、「まつり」、共同購入、溜り場の出発へと活動内容を発展させ、種々の団体、個人との提携関係をつくる。そのときに、映画「病院で死ぬということ」は大きな役割りを果たす。上映運動の広がりが、京都高齢者事業団の幅の広がりと、深みをつくり出してくれることだろう。

来年に、高齢者協同組合（ないし生協）の組織変更をすることを目標にして、今年の新年度はすでに始まっている。

---

### 「雲仙・普賢岳災害支援ツアー」への参加よびかけ

---

多発する災害とこれへの対策は日本の国民的課題。災害発生2周年を迎え「現地を見よう、住民と交流しよう、励まそう」という2泊3日のツアー。

〈日程〉5月7日（金）羽田発7：35～5月9日（日）羽田着17：40

〈内容〉雲仙・仁田峠・測候所・島原市・学校等調査視察、現地救援センター・住民等との交流。8日は日本科学者会議等の合同調査団に合流。

〈参加費〉羽田長崎間の飛行機、バス、宿泊2泊、食事込みで1人79,500円（現地参加37,500円）

〈主催〉雲仙・普賢岳の被災を考え支援するネットワーク（山手教会気付）、代表世話人：平山照次、津上忠、大屋鍾吾

〈問合せ先〉毎日新聞労組・水久保03-3213-8020